# THE BOY RESISTANCE　ARMY

Mou+doku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＴＨＥ　ＢＯＹ　ＲＥＳＩＳＴＡＮＣＥ　ＡＲＭＹ

【Ｎコード】

Ｎ５４９９Ｙ

【作者名】

Ｍｏｕ＋ｄｏｋｕ

【あらすじ】

謎の生物ＰＰＧＯＬとその抵抗軍ＲＥＤ　ＨＯＰＥとの壮絶な戦いを描いたホーラーアクション小説です。

## 戦場に目覚めた少年

痛ぇ…鈍器で殴られたような頭痛がする…完全に目が覚めた。
その頭痛で自分が自転車で通学中トラックと事故にあったことを思い出した。
多分ここは家の近くの九州中央海病院だろう。ふと俺の横に置かれていた自分の携帯を見ると俺が約一ヶ月も気を失っていたことが分かり驚いた。
病室はいかにも普通で、壁は白く床は白のタイルが張ってある。窓側と廊下側にベッドが2つずつ置いてありその横の棚には花のない花瓶が置かれていた。外の空気でも吸いたいと思い窓を開けた。窓からは車が数台置いてある駐車場が見えた。
しばらく経ってからあることに気づいた。

「……」

静かすぎる。最初は病院だからと気にしていなかった。でも誰の声も一切聞こえてこない。そのうえ窓を見ても駐車場には人影すら見えていない。一言で言って…不気味だ…
たまらず病室を出た。ナースステーションならさすがに誰かいるだろう。そう思いナースステーションに向かった。そこに着くま廊下やエレベーター内でも人に会わなかった…
ナースステーションに着くとそこは当たり前のように誰も居なかった。俺は興味本位で中へ入った。中は机を中心として棚が置かれてあり棚は医療道具があった。机のうえに置いてあるファイルがあった。
「検温表…」
そう書いてあった。その中をパラパラとめくると不思議な事に11

月27日から記録がない。今日は12月3日だこれを書いた人はどこへ行ったのだろう？気づくとカレンダーも11月のままだ。
おかしい何でだろう？
「うあああああん！！！」
「！？」
何事かと驚いたここから近いところで大声でなく女の子の幼い泣き声がした。急いでそこへ行くと廊下の窓側に4、5歳ぐらいのツインテールの髪に水色のジャンバーを着た可愛らしい女の子がしゃがみながら泣いていた。
「どうしたの？」
なるべく怖がられないようにそっと近づいて言った。
「うあああああん…ロンが…ロンがどっか行ったの…」
「ロンって誰？」
泣き止んだところで俺が言うと
「あたしの家のワンちゃん…居なくなったの…お兄ちゃん誰？」
グスングスンと言いながらそう言った。
「ああ、俺は平生　創真、君の名前は？」
「美優」
「美優ちゃんか…ママかパパはこの病室に居る？」
そうそっと尋ねると悲しそうな目をして
「ママとパパはこの前…天国に行ったんだ…」
と言った。俺は悪いことを聞いてしまったと思い話題を変えた
「えーとロンだっけ…一緒に探そうか？」
「うん」
と言って手を差し伸べた。すると彼女は手を掴んだ。
いきなり美優ちゃんの目が見開き俺の背後に指を差し
「プーグルだあああ！！」
と叫んだ。驚いてうしろふり返ると。刹那―。
ドン！！という銃声が響き美優ちゃんの悲鳴が鳴り響き鮮血が散らばった―。

美優ちゃんは泣きながらその場にしゃがみこんだ。
「うあああ―！！」
美優ちゃんは撃たれたのだ。美優ちゃんは左側の脇腹を撃たれており出血している

美優ちゃんを撃った犯人を一目みて人ではない事が理解できた…全身は岩のようにゴツゴツした皮膚していて肌はコケのような緑色だ。背丈は優に2メートル以上あるだろう。頭からは角のような突起物があり目はまっ黒で白目がない。何よりも口が耳あたりまで裂けていて大きくサメのような鋭い牙も見える。さらにマシンガンに似た形状の銃を持っている。

どうしよう！！美優ちゃんを助けたい！！逃げよう！！撃たれる！！殺される！！怖い！！

頭の中で様々な思考が働き冷静になれなかった…俺は混乱してわけがわからず立ちつくした…「グォォォォウ！！」
緑色の化け物は獣のような鳴き声で叫んだ…威嚇しているようだ…俺はあまりの迫力にその場で尻餅をついた。このままでは殺される！！その時だった。

「伏せろ！！」

いきなり声が聞こえたと思うと激しい轟音と共にガラスが割れる音

と銃声が鳴り響いた。
窓ガラスを割った弾はそのまま緑色の化け物の頭部を貫いたようで、バタンと派手に倒れて動かなくなった…多分即死だろう。窓からはいくつものヘリコプターが飛んでいたようでバタバタと激しい轟音を発している。するとヘリが上昇しロープが見えたと思うと、黒色の軍服のようなな服を着た人が次々と窓ガラス蹴破って病院内に入ってきた。俺は呆気にとられていると
「おい！！ケガはないか！？」
そう声をかけたのは髪は黒で顔もアジア系なのに青い目をしているという印象的な青年が言った。俺は今いち状況が掴めなく混乱しながらも
「俺はだっ…大丈夫です…でもそこの女の子が撃たれて…俺なんかよりも早く助けてあげてください！！」
と言った。美優ちゃんをみると泣き止んでいるのか？と一瞬思ったが脇腹からは信じられれないくらい出血しているところを見る限り気を失ったようだ。青い目をした青年はすぐに気づいて
「救護班の葉田はいるか！？」
と大声で隊に向かって言った。「はい…加藤隊長？」
小さい声で耳にかかる黒髪をしている小柄な少年がでて来た。言った。話から小柄な少年が葉田で青い目の青年が加藤というらしい。葉田はすぐに美優ちゃんを見つけ傷口を診察した。
「ダメみたいですね…」
葉田が哀れむような顔で言った。
「何でだよ！？まだ息をしているだろ！？」
俺は立ち上がり葉田に言った。「息はしていても…傷口が深くて出血量が…それに血の匂いで後を着けられる可能性があります…」
そんな…俺は膝まずいた。その時ピー、ピーと電子音が鳴った。
「大将、熱線反応ですよ…間違いなくプーグルですね。」
そう言った黒髪に短髪の少年は眠たそうにしていかにもやる気のない顔をしている。だが眠たそうな目を覗けば顔はいい方だろう

「分かった。おい救護班、救出者をヘリに乗せろ。残りの救護班と河谷と亮二は死体を外に燃やしに行け」
みんなを見ながら加藤が言った。そういうと救護班は美優ちゃんの死体と緑色の怪物を抱えた。すると葉田が
「早く上の階へ、避難しますよ。」
と俺に話しかけた。俺は
「何で今すぐ死体を焼くんだよ…それに…まだあの子は生きてるだろ！！」
すると
「グォォォーウ」
と近いとこから獣の威嚇のような声が聞こえてきた。さっきの怪物の仲間だろう。途端に救護班以外の人達はハンドガンを構えた。どうやら銃を持っているのは戦闘部隊だけのようだ。葉田が慌てて
「詳しいことは後で話しますから、今は早く避難してください！！」
「ふざけんなよ！！ここは病院だろう！！医療道具ならいくらでもあるだろ！！」
すぐに反論した。しばし沈黙が続いた。するとその間に廊下に緑色の怪物が複数現れ発砲しながらこちらへ向かってきた。幸いに距離は少しある。すぐさま戦闘部隊が応戦したようで銃撃戦が始まった。焦った葉田が
「口論してる時間はないんです！！早く上に避難を！！」
「俺の事は後でいいって言ってるだろ！！」
「てめぇいい加減にしろ！！」
そう言ったのは鋭い目つきに髪は茶髪。さらにピアスを着けていてドラッドヘアというあまりいい格好とは言えない青年だ。つかつかとこちらへやってきて胸ぐらを掴まれたかと思うとピアスを着けた青年に思いっきり殴られた。
「そんぐらいの事でごちゃごちゃ言ってないでさっさと避難しやがれ！！」
「そんぐらいの事じゃないだろ！！」

そう言って次に俺が殴り返そうと起き上がった時
「そこまでだ」
後ろから俺の頭に冷たいものが突きつけられた。その直後カチッと弾を装填した音が聞こえたのが響いたので銃だとすぐに分かった。声からして加藤だった。後ろをみるとピアスを着けたの青年も加藤がハンドガンを左手で向けている。
「次俺が言ったことに従わなければ撃つ」
俺とピアスを着けた青年に緊張が走った。青い瞳で見つめられると全てを見とうされたような錯覚になった。口元は不適な笑みを浮かべている…どうやら本気らしい。
「健太郎。お前は今日だけ死体を下まで運ぶ係りだ。早速運んでくれいいな?」
加藤はこいつに頭を冷やせと言ってるのだろうかピアスを着けた青年に向かって言った。話から健太郎とはピアスを着けた青年のことなのだろう。健太郎は反抗的な目で一瞬睨んだものの、反論しても無駄だと思ったのか

「分ったよ…」

と言った。加藤は周りを見た。
「よし4体片付けたな…戦闘部隊はここに残って任務を遂行しろ、河谷が指揮を取れ。俺と葉田以外の救護班は屋上へ待機。」
怪物は全部頭を撃たれて死んでいた。戦闘部隊の人達はかすり傷こそ負っているものの全員無事だった。無事を河谷と呼ばれた眼鏡の青年が確認すると彼を先頭に戦闘部隊の人達はどこかへ行ってしまった。それを見送った後、視線が俺に戻り
「さて…お前も早く避難しろ。時間がないんだ」
「何故助かるかもしれない女の子を置いて逃げなくちゃならない！！」
即答でそう答えた。次の瞬間―ドンっという銃声が聞こえた。

くっ…こいつマジで撃ったのかよ。太ももを撃たれていたようで血がズボンに、にじみ出てきた。だが傷は浅かった。恐らく急所は避けたのだろう。
「もう一回だけ聞いてやる…避難しろ。命が惜しくないのならな」
こいつの性格上本当に次は殺されるかも知れない。だからといって美優ちゃんを見捨てる気はない俺は加藤の目をまっすぐ向いて言った
「もし…自分だけ助かったとしても俺は家族や友達に胸張って生きれないと思う」
「何が言いたい？」

「俺は自分にだけは嘘をつきたくない」

今この瞬間にも殺されるかも知れないのに、自分でも驚くぐらい冷静な口調で言えた。しばらく加藤は考えていた。すると加藤は舌打ちをして
「お前の頑固さは支部長並だな…」
と言い銃を下ろした。
「おい葉田、そこの女の子も屋上へ連れて行け」
「え！？隊長それは命令違反ですよ！！」
葉田がそう言った。すると加藤は頭を掻きながら
「そんな事は俺も分かっている…もしもの時は責任は俺がとる。とりあえず俺らは屋上で待機だ」
葉田はしぶしぶ
「了解です…」
そう言うと救護班の人達は美優ちゃんを大事そうに抱えて屋上へ行った。どうやら美優ちゃんを助けてくれるようだ
「さあ早く俺らも行くぞ」
「あの…加藤さん、ありがとうございます。」

「礼なら後でいくらでも貰ってやるから早く屋上へ行け」
そう行って加藤と美優ちゃんを抱えた救護班と俺達は屋上へ行った

「あの女の子は妹さんか？」

そう屋上で加藤がヘリの機内で尋ねてきた。機内では暖房がついておりとても暖かい。
「いや違います。病院内で会ったんです。本当にありがとうございます」
「別に敬語じゃなくてタメ口でいい。年も近そうだしな」
そう加藤が言って戸惑ったが
「じゃあそう呼ばせてもらおうかな、敬語とか堅いのは正直苦手だし」
しばらくしてから加藤が思い出したように
「そういや名乗ってなかったな…俺は加藤　龍也、１８歳だ。」
そう俺と手を交わしながら言った。慌てて俺も
「平生　創真、１６歳です。」
と名乗った。
「ん？ヒラバエってどう書くんだ？」
不思議そうに俺の名字尋ねてきた
「えーと平成の平に、生活の生」
「それでヒラバエって読めるのか…」
そうかそうかと一人で加藤は何度も頷いた。
「ところで平生、何でこの九州中央海病院に避難もせず。残っていたんだ？」
いよいよ話は本題に入ったようだ

「それが…俺もよく分からないんだ…一ヶ月前トラックと事故って気づいたらここに…」
「一ヶ月前か…なる程。」
加藤は考え込んでいたので、俺はしびれを切らして一番気になる質問をした
「あの緑の怪物は何なんですか？」
「ああプーグルのことか？」
「プーグル？」
そういえば聞き覚えのある単語だ
「正式にはＰｅｒｓｏｎ　ｐａｔｔｅｒｎ　ｇｌｏｂａｌ　ｏｕｔｓｉｄｅ　ｌｉｆｅだ。直訳すると《人型地球外生命体》というらしい。まあ大半の人が頭文字をとってＰＰＧＯＬと呼んでいる…お前が気を失っている間に日本や世界各地にＰＰＧＯＬは上陸し殺人ウイルスをばらまいたり、奴ら独特の兵器を使い侵略をはじめた…今じゃもうほとんどの国が奴らの占領下になっちまった。」
自分でも予想はしていたがそれ以上の事態にで絶句してしまった。

## 戦場に目覚めた少年（後書き）

読んで下さってありがとうございますｗｗ
毎週の金曜日に掲載していくので応援よろしくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5499y/

ＴＨＥ ＢＯＹ ＲＥＳＩＳＴＡＮＣＥ　ＡＲＭＹ

2011年11月25日23時55分発行